
神殺しは眠れない

下山八尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神殺しは眠れない

【Nコード】

N0451B

【作者名】

下山八尋

【あらすじ】

‘神殺し’と称される洗脳外しのプロ、匂坂昭彦の最後の事件

序章 匂坂昭彦（さきさか あきひこ）

夢を見た。大概の例に漏れず、起きた時には詳細な内容は覚えていなかった。ただ目覚めた時の——ざらついた、ねっとり、と相反する感覚。しかし共通の不快感という感覚。それだけがしっかりと僕の認識の中に在った。フロイトならどう分析するだろうか？

ユングならばどう解釈するだろうか？ 「君は馬鹿か？ 見た内容を覚えてないのにどういう答えをもらう気だ。そもそも、どう彼らに伝えるんだい？」

全くだ。僕はのろのろとベットから降りると、冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出す。

「やれやれ。今日も昼過ぎにそうやって起き、無気力に一日を過ごすのかい？ 全く良いご身分だな」

僕は返す言葉も無く口許の水を拭った。

「さて——私は君と違い吸収すべき知識が多量にあるのでね。まあ精々愚鈍に時間を消費し給え」

僕が「百眼」と呼んでいる男の声が止むと僕はふうと息をついた。冷蔵庫の唸りが聞こえる。ふと壁に掛かっている唯一の調度品に目がいった。13日の金曜日。気分が少し重くなった。そしてその憂鬱さは二時間後の電話によって実現となる。

「退院よ」

真喜子の声は半年ぶりなのに堅く、冷たい。僕はそれだけを伝え切れた受話器を壁に掛け戻し、黒のフリース、ジーパンという外出着に着替え、ドアが開くのをベットに腰掛け待った。やがてカッソカツンと小気味好い音が近付いて来ると、僕の部屋の前で止まった。仰々しくドアのロックが自動で外れると、内側に向かって今度は音も無く開く。

「今度はどんな‘神サマ’だい？」

真喜子は上辺だけの挨拶は好まない。半ば禁欲生活者達が詰め込まれているここに来るのに膝上丈のミニスカート、化粧の乗りは今日も良い。自分に自信があるのだ。だから他人の世辞や挨拶など時間の無駄だと考えている。

梅島真喜子——国家公安委員会、第9分室室長。

「宗教法人、神の郷」

それだけ言つと真喜子は僕の足下に身分証を放った。自分より力のある者が跪く。この女はそういった光景が好きなのだ。

「出なさい。国家公安委員会第9分室嘱託補員、匂坂昭彦」

僕は彼女の前に跪き、身分証を拾いあげた。

序章 匂坂昭彦2

「休暇は満喫できたのかしら？」

カッンカッン。

真喜子がなんともなしに僕に聞く。

僕らは長い、病的とも言える真白な廊下を歩く。真喜子のハイヒールの音が酷く五月蠅く響く。

ガキンッ。

「前回の影響は残って無いと思います」

一つ目の鉄格子製の扉を抜け、開けた看護師に軽く手を上げながら、僕は答えた。看護師は真喜子の脚に視線を向けたままだったが。

カッンカッン。

「そう。使い物にならなかつたら仕方ないしね。良かったわ」
ガキンッ。

「簡単にあらましを教えて欲しい」

二つ目の鉄格子製の扉を抜け、僕は言った。

カッンカッン

「誘拐」

真喜子はそれだけ言うと、ストレートに伸びる黒髪を手で払った。なるほどね。僕は受付とは名ばかりの、監視所の看護師から、自分の薄手のハーフコートを受け取り、袖を通しながら呟いた。プロレスラーの体躯を持つ、受付の看護師は真喜子の脚は見ず、僕に敵意のこもった視線を投げていた。

「重要犯罪緊急対策機動警察隊は動いているのかね？」

僕の声で、百眼、が真喜子に聞いた。

「確か誘拐専門チームが存在する筈だが？」

カッンッ。

真喜子の足が止まる。

「確かに、動いているわ。ただ何故動いていると？」

「君の疑問はつまり——なぜただの誘拐が重要犯罪に指定されていると私が分かったのか、という事かい？」

「百眼」は今にも吹き出しそうになるのを抑え、

そう確認の言葉を吐いた。真喜子の表情は僕からは見えない。が、おそらく頬は赤く染まっているだろう。「百眼」は真喜子の性格をよく知っている。

「百眼」は言葉で相手を決る。

僕はそれより——相方はいつもの時田さんですか、と話題を変えた。

「時田さんもこの前の事件で酷いめに会いましたから……」

「時田は辞めた」

真喜子は簡潔に答えると、ハイヒールを響かせ、また進み出した。どうやら「百眼」の言葉は聞かなかった事にしたらしい。「相変わらずな、女だ。出世欲に駆られた女ほど分かりやすい者はないな。昭彦くんもそう思うだろう?」「百眼」が僕に嘲るように言った。「欲に駆られた人間に隙が出来るというのが奴の教えだったな」僕は無難にそう答えた。

病院の外は10月にしては肌寒い。入口に横付けされた後部座席のドアが開いた車の横に、真喜子はもう一人の女性と共に僕に向かい立っていた。

「桐谷亜夜警部補、貴方の新パートナーよ」

よよよろしくお願ひします、と挨拶をする桐谷さんに真喜子は

「気をつけなさい。彼は人は、壊す、わ」と言った。

「人を紹介するのにそんな紹介あるか」

差し出した右手が何も得れないまま、僕のコートのポケットに戻った時、車の無線が切迫した内容をがなりたてた。

「……害者宅に犯人より入電。害者宅に犯人より入電っ!」

第一話 始まりの仮説（前書き）

読んで頂いた36人の読者の方へ、感謝の意を込めて

第一話 始まりの仮説

マル害宅に入電――。

「ボリユームを上げる」

「百眼」が僕の声でそう言った。

車は既に動き出しており、ハンドルを握る桐谷警部補は、は、はいとインパネ周りを操作する。

「マル被と交渉役との会話を無線にのせる」

助手席では真喜子が携帯電話に向かって怒鳴っていた。

「――神の郷、アンエイブ、サイトウだ。我々の要求は二つ」

「真喜子っ!」

分かってる、と真喜子はボールペンを走らせている。

「――なんだい?」

交渉役の声。

「――一つ活動資金一億円」

「――いい、一億……」

「――二つ、テドユウサクの釈放。以上だ」

「ちょ、ちよつと待って、くれ」

「――二時間後また連絡する」

「――お、おい」

ジツ、と無線が切れた。

ふん、
「百眼」はそう呟くと後部座席のシートに身を委ねた。ふう
うと真喜子もボールペンをジャケットに戻す。

「感想は?」

「百眼」はバックミラー越しに真喜子に視線を合わすとシニカルに笑った。

「彼からの電話はこれで何回目だ?」

「二回目、いずれも神の郷、アンエイブ、サイトウと名乗っている」
「具体的な要求はこれが始めてか?」

「ああ」

「現状で分かったのは真の目的は、金、ということだけかな」

「なぜですか？」

桐谷警部補と同じ疑問を僕も、‘百眼’に持った。「真つ先に金の要求。目的は金だよ」

「で、でも本当の目的を二番目にいうということも……」

「澁みなく会話していた。いや、会話をしてない。一方的に話していた。十中八九、斉藤は原稿を読んでる」

‘百眼’は煙草に火をつけた。

「原稿を書いたのはサイトウなのか、それとも他の誰かは分からないが、少なくとも私は二番目の要求は後付けにしか聞こえないな。覇気も感じられなかった」

「勘？ それとも感、かしら」

真喜子も紫煙を吐き出しながら言葉を放つ。

「なににせよ、仮説を立てて理を推していく。それが予想と推理の違いだ。頭の片隅で疑う事を消さない限り、この仮説は後でどうにでも撤回はきく。いいか、真喜子、桐谷警部補。自らの仮説に対して自身の身を委ねるのは愚か者のすることだ」

「撤回する可能性の推理を言う事が私は恥だと思っけど？」

「それこそ話を局地的にしか見れていないな。いいか、真喜子？

この場合の恥は事件を最悪の形で終焉する事だ。それ以外はどんなに的外れだろうが、なんの問題にならない」

「じゃあ、現時点では何も分かっているのと同じじゃないですか！？」

そう——後部座席の灰皿に、‘百眼’は煙草を押し付けた。

「それは確実な仮説だ、桐谷警部補。そう我々は犯人側の事を何も分かって無い。忘れるな、何も分かかってないのだ」

第二話 匂坂、最前線へ（前書き）

アクセスしてくれたあなた。僕はあなたの為に書いています。

第二話 匂坂、最前線へ

「マル害って誰なんだい？」

僕は何気ない疑問を口にした。病院での‘百眼’の指摘にそれなりの人物なのだろうが。

「……………」

「……………」

僕の問いに真喜子は二本目の煙草に火をつけ、桐谷警部補は沈黙で返した。僕もなんともなしに煙草に火をつけた。

「誘拐されたのは——」

二回程灰を落とし真喜子は言った。

「与嶺宮一宏のご子息、与嶺宮貴子よ」

へえ——僕はなんともなしに言った。

「有名な人なの？」

再び沈黙。しかし、先程とは質が違う感じがした。

「法務大臣、与嶺宮一宏氏ですよ」

「へえ」

そりゃあすごい。

「……………」

「無理よ、桐谷警部補。こいつに事の重要性は通じないわ」

「マル害がどんな人物だろうがマル被そのものにはあまり関係ないしね。うん、詳しい事は資料ちょうだい。ところでさあ——」

僕は言った。

「これ、どこ向かっているの？」

真喜子は大袈裟に溜め息をつきながら言った。

「確かに、説明していなかったわね。その与嶺宮氏の自宅兼、誘拐事件捜査本部よ」

閑静な住宅地、といえは月並みだが、車のエンジンを切ると辺りは水を打ったように静かな一角。そう——まるで誘拐事件など起きていないかのような静寂だった。

「おはようございますっ！」

先に車を降りた真喜子、桐谷警部補が大袈裟な大声を上げた。

僕もゆつくりと車外へ出る。「ご苦労だな、梅島室長、桐谷警部補」静かな、落ち着いたトーン。この声には聞き覚えがある。そう思った瞬間——僕の表層意識に強制的に「百眼」が浮かび上がった。「久しぶりの現世はどうだ？ 勾坂。いや、今は「百眼」の筈だな」「なあに、いつでも忙しく、空気が重いよ。前は会わなかったから、一年と三か月ぶりか。国家公安委員会委員長、間宮圭一朗」ふん。黒のスーツにハイネックの同色のセーター。乱れない白髪交じりの髪。そして、一際目立つ冷血な光りを備えた、まるで爬虫類のような目。その視線を覆うように在るフレームレスの眼鏡のブリッジを上げると、間宮委員長は言った。

「百眼」、ここが最前線だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0451b/>

神殺しは眠れない

2010年10月15日20時41分発行